

# 東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2021

## 「ほがらかに生きる ～大学は知の宝庫～」

第6回 12/3 (金) 13:30～15:00 報告

東日本大震災から10年

講師 アンドリュー・デュアー (本学教授) 於：図書館大セミナー室

\*◆◆◆\*◆◆◆◆\*◆◆◆◆\*◆◆◆◆\*◆◆◆◆\*◆◆◆◆\*◆◆◆◆\*

令和3年度第6回講座が2021年12月3日に開催されました。本学教授兼図書館長・同附属東海第一幼稚園園長のアンドリュー・デュアー先生により「東日本大震災から10年」というテーマでご講演をいただき、東日本大震災から10年経った現在の状況と課題につきまして、デュアー先生の実体験を踏まえながら、お話をいただきました。

まず、10年前の東日本大震災発災当時、デュアー先生が実際の福島での経験から話をされました。2011年3月9日の午後に大きな余震があり、その後2011年3月11日2時ころに緩やかな揺れから始まり、震度7の揺れが5分半も続いたようで、揺れが本格的に止まることはなかったとのこと。デュアー先生が避難しておさまるのを待っていたようですが、「いつになったら元に戻るかな？いや、元に戻る、ある？」と率直に思ったそうです。

あれから10年経過しましたが、「震災」の終焉や復興を待っている人は依然として多く、少なくない被災者にとって、「震災」はまだまだ終わってはいません。とくに、津波や原発の復旧・復興はまだ道半ばです。デュアー先生は常磐線が全線再開したのは2020年3月であることを強調します。また震災における死者数は、2021年3月には関連死の人数も加わり、19,747名にものぼり、2,556名はいまだに行方不明です。関連死、自殺、うつの問題は依然として深刻化しており、避難生活なども長期に続いており、2021年2月の時点で、約4万人は未だに避難中という状況です。

仮設住宅は一番多いときで、約124,000戸に及び、2021年になっても931戸が残っており、経済面や気力の面で困難をもつ高齢者が多く残っているとのこと。世界銀行の推計では、東日本大震災は自然災害による経済損失額は史上第一位です。

デュアー先生は、阪神淡路大震災以降の建築基準の強化のために、地震そのものの影響は比較的少なかったが、津波や原発による被害の大きさを強調します。たとえば、岩手県・宮城県・福島県の3県で発生した184万トンの災害廃棄物と津波堆積物の処理が完了したのは2017年3月であり、6年もかかったことから、その被害の大きさを物語っています。

東北の太平洋沿岸に住む人々は津波に慣れているとのこと。常に対策をとっていたそうです。たとえば、「てんでんこ」は、各自が命を守ることで、結果として生き残る数が多くなるという意味を持ち、古くからこうした教えを守ってきました。多くの小学校では「てんでんこ」を実践しており、教師はみんながそれぞれ、逃げるように指示しており、多くの子どもの命が守られました。

一方で、多くの人々は失った家族への想いをどのように処理するかについて、非常に困惑をしながら生活をしているという現状もあります。2011年に岩手県大槌町のガーデンデザイナー・佐々木格が死別した従兄弟ともう一度話したいという思いから自宅の庭に設置した「風の電話」は、「天国に繋がる電話」として人々に広まりました。電話は実際には、どこにも繋がっていないが、生存者は「風の電話」を用いて、死別した家族への想いを風に乗せて伝えられます。津波で半壊した建物を一部残して、記念碑としているところがあるが、その痛い記憶をあえて残すのかどうかという点において、世論が分かれています。生存者の様々な想いをどのように考えていくのかがとても大切な課題となりそうです。

東日本大震災における「復興」という用語は、基本的に「津波」の被害を処理するということを指していることが多く、特に防波堤の建設と強化、そして住宅街の高台への移転を意味するとのことでした。一方で、高台移転に対する保障は不十分であり、津波が家を破壊しても、家のローンが残っていることが多く、高台で土地を買うとなると、二重ローンとなるなど、被災者にとっての「復興」という視点が非常に弱い点も指摘されました。また、政治家の発言も、被災者の生活を考えていないことが多々あるとの指摘もなされました。

また、原発事故については10年経った今でも、手つかずに残っている問題が数多くあるとのことでした。デュアー先生によれば、放射能は木や土壌に残るために、すべて伐採する必要があり、双葉・大熊・浪江町は依然として帰宅困難地域であり、一部帰宅するものもいるが、子どもにとって健康被害は非常に大きいため、実質的には当該地域には住むことは困難であることなどが示されました。震災当時の子どもの状況についての記録は刻銘にとるべきでありましたが、甲状腺に関するデータなどについては基本的には破棄させられてきた現実もあります。

デュアー先生のご講演から、地震・津波・原発被害等が10年経った今でも多くの被災者が依然として、生活に困難を抱えており、様々な想いを抱えながら生活していること、実質的な「復興」は道半ばであり、被災者の生活に寄り添った支援が必要であることを改めて学びました。日本は災害大国であること、また現在も全世界的に蔓延している新型コロナ・ウィルスによる社会的・経済的影響を踏まえると、日本に暮らす人々にとってやさしく、希望のある社会になってほしいと強く感じました。

アンドリュー・デュアー先生、貴重なご講演をありがとうございました。また、2021年度第6回講座に集まっていただきました参加者の皆様、どうもありがとうございました。

【講座の様子】

